

---

# Maithingu Evolution Rebirth THE Fainal Battle

ネガ・ナハト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウルトラマン Faithing Evolution Rebirth THE Final Battle

### 【Nコード】

N8114X

### 【作者名】

ネガ・ナハト

### 【あらすじ】

今作品は、PS2ゲーム「ウルトラマン Faithing Evolution Rebirth」の続編を作者がオリジナルで作った作品です。作者の思うがままに書いた作品なので、納得の行かない展開が読者によってあるかもしれません。読む際は注意してください。ちなみに、タイトル変更しました。

## EPISODE 00 逆襲の予兆

今からちょうど2年前、どんな出来事が起こったのかわからない者はいない。

2年前、メフィラス星人が怪獣軍団を率いて地球を侵略しにきた。だが、7人のウルトラマン達がそれを許すはずもなかった。

7人のウルトラマン達の活躍により、メフィラス星人は自分の負けだと認め、地球を去り、地球の平和は守られた。

それから2年

（都内某所、調査隊本部）

「隊長、メフィラス星人が地球に攻めてきたあの日からもう2年が経つんですね。」

「ああ。メフィラス星人は最後にまた来ると言ったきり、もう2年が経つのか。」

「メフィラス星人の奴、諦めてもう地球侵略しに来ないんじゃないんですか？」

「どうだろうな。メフィラス星人の奴はそう簡単に諦めるような奴じゃない。もしかしたら戦力増強を図ってこの2年間来なかっただけという考えもあるからな…。」

「ええ、そんな…やめてくださいよ隊長。ただでさえあの時でも手

強い怪獣ばかりいたのに更に強くなってきたりしたら…うう、考  
えるのも嫌だ…。」

「確かにな…前より強い怪獣なんか襲ってきたら、さすがにウル  
トラマン達も…」

ピーッ！ピーッ！ピーッ！

突然警報が鳴る。

「何事だ！」

「大変です！市街地に怪獣が現れたことです！」

「何だと…！？まさか、メフィラス星人の逆襲の予兆なのか…！？」

「行ってみなければ分かりませんね。隊長、出動します！」

「よし、頼んだぞ！」

「了解！」

メフィラス星人の2年前の逆襲の予兆が、調査隊を不安にさせる…。  
果たして、市街地に現れた怪獣の正体は…！？

EPISODE 00 逆襲の予兆（後書き）

「ウルトラマン Faithing Evolution Reverse」をプレイして、感動のエンディングを迎えて、私は思った。

『いつになったら続編は出るんだ!?!』

そう思ってから早5年。だったら、待つよりも、自分が望む続編を書けばいいんだ!と、思い今作品を投稿しました。

今回は全体の設定を投稿します。

お楽しみに!!

## 登場キャラクター（前書き）

今作品に登場するキャラクター達です。

## 登場キャラクター

は新規参戦キャラクター

ウルトラ戦士

・ウルトラマン

・ウルトラセブン

ウルトラマンジャック   ウルトラマンエース

・ウルトラマンタロウ

・ウルトラマンレオ

ゾフィー

ウルトラマン80

???

・ウルトラマンティガ

ウルトラマンダイナ

・ウルトラマンガイア

・ウルトラマンアグル

・ウルトラマンコスモス

ウルトラマンネクス

???

## 怪獣

・バルタン星人

ゼットン

???

・ジエロニモン

・メフィラス星人

キングジョーブラック

ヒッポリト星人

・タイラント

- ・改造タイラント
- ・改造タイラント?
- マグマ星人
- サラマンドラ
- ???
- キリエロイド?
- ???
- レイキュバス
- ???
- 超ゴツヴ
- ???
- ガンQ
- ???
- ・ワロガ
- ・カオスワロガ
- グランテラ
- ダークファウスト
- ダークメフィスト
- ダークメフィストツヴァイ
- ???
- ・ネオカオスダークネス
- ・カオスロイドU
- ・カオスロイドS
- ???
- ???
- ・カオスロイドT
- ???
- ???
- ???
- ???
- ???



?  
?  
?  
?

## 登場キャラクター（後書き）

????のキャラクターは、物語が進めば明かされます。  
感想お待ちしております。

EPISODE 01 最後の挑戦

〔市街地〕

隊員「隊長。目的地の市街地に着きました。」

隊長「どんな怪獣がいるか分からん。気をつけるんだぞ。」

隊員「了解！」

調査隊のヘリは市街地に着く。

すると、隊員は市街地に現れた怪獣を発見する。

隊員「隊長！怪獣を見つけました。……この黒い体に人型の体型……って、まさかコイツは！」

隊長「どうした！何がいたんだ！」

隊員「メ、メフィラス星人です！メフィラス星人が街の中央に立っています！」

隊長「なにに！メフィラス星人だと！？……どうして黒幕である筈の奴が地球に……！？」

隊員「分かりません！見た感じ怪獣を引き連れているようですが……！あれは……！？」

隊員が上空を見ると、駆けつけたウルトラマンが地球に降臨する。

隊員「ウ、ウルトラマンだ！ウルトラマンが来てくれました！」

隊長「もし奴が一人だけなら決着をつけるには良いチャンスだ…！  
頼んだぞ、ウルトラマン！」

ウルトラマンとメフィラス星人はお互いに睨み合い、ウルトラマンがスラッシュ光線を放つが、メフィラス星人は弱グリップビームを放ち、お互いの光線は相殺された。

メフィラス星人「フンッ！」

ウルトラマン「ヘアッ！」

メフィラス星人がウルトラマンに近づき右ストレートを当てようとするがウルトラマンはそれを受け止め背負い投げする

ウルトラマン「ダアアッ！」

メフィラス星人「ファッ！×4」

ウルトラマン「ハウア！」

ウルトラマンは一旦距離を取るも起き上がった直後のメフィラス星人に弱グリップビームを喰らってしまう

ウルトラマン「ダアアッ！」

ウルトラマンは仕返しに八つ裂き光輪をメフィラス星人に喰らわせようとするが…



**EPISODE 01 最後の挑戦（後書き）**

感想お待ちしております

EPISODE 02 記憶無き戦士

数ヶ月前、光の国にて

セブン「デュワッ！」

ノア「ハアッ！」

ザギ「ムンッ！」

突如光の国に現れたダークザギ。それを迎え撃つ、ウルトラセブんとウルトラマンノア。

セブン「デュワッ！」

ビイイイ

ザギ「ムウンッ！」

バチイ

セブンはエメリウム光線を放つがザギは左手でいとも簡単にはじいた

ザギ「ムウウウ、ハアッ！」

セブン「ゲアアア！」

ザギは右手からザギスラッシュを放ち、セブンは吹き飛ばされてしまっ

ノア「へアアアッ！」

ザギ「グオツ！？」

だが、隙を見せたザギにノアが飛び蹴りを喰らわせる

遠く離れた場所にて

ゾフィー「皆、急ぐんだ！このままではセブンとノアが危ない！全速力で飛ばすぞ！」

「「「おうつ！」「」」

ゾフィーは、マン、ジャック、エース、タロウ、レオ、80を率いてセブンとノアのもとへと急いだ

セブン「グッ…！」

ザギ「どうした？セブンの方はもう終いか。やはりノア、貴様でないと俺の闘争の欲は満たされんようだ」

ノア「ザギ！なぜ、光の国に現れた！お前の目的はなんだ！」

ザギ「もちろんノア、貴様との決着だよ！」

ザギはザギスラッシュを連発するが、ノアも負けじとノアスラッシュを連発して応戦するがザギの方が優勢だった



ザギ「フハハハハ。どうしたノア。お前の力はそんなものじゃないだろう?」

ノア「クツ…前よりもパワーアップしている…!」

ザギ「これで終わりだ…!」

ザギはエネルギーを溜め、グラビティザギを撃とうとするが…

ゾフィー「ダアアアッ!」

ジイイイ

ザギ「グオオオオッ!」

突如乱入したゾフィーのZ光線を喰らい、グラビティザギが中断されてしまう。

ゾフィー「ノア!大丈夫か!?!」

ノア「私は平気だ…それより、セブンの方を…!」

セブン「心配するなノア。私も平気だ。」

ザギ「ヌウウウウ、ウルトラ戦士が集りよって…!」

ゾフィー「皆、ザギは手強い。一気に片をつけるぞ!」

「「「おうっ!」「」「」

ゾフィー「ダアアアッ！」

ビイイイ

「「「シユワアアア！」」」

バシユユ

ビイイイ

ゾフィーはエネルギーを溜める動作はせず、L字型のM87光線を放ち、マンとジャックはスペシウム光線、セブンはワイドショット、エースはメタリウム光線、タロウはストリウム光線、レオはシューティングビーム、80はサクシウム光線を一齐に放つ

ザギ「フンッ、たかがこの程度……」

ザギはジャンプして、一齐光線を避けるが……

ノア「かかったな。」

ザギ「何！？グオオオ！」

チャージしていたグラビティノアを喰らい、吹き飛ば

ザギ「おのれえ、格なる上は……！」

ザギ「ムオオオオオオオオ！」

ザギは力を溜め、地面を揺るがすと、ザギの背後に黒と赤のホールが現れる

タロウ「な、何だ!？」

エース「いかん、吸い込まれる…!」

ザギ「フハハハハ! 貴様らは俺と共に闇の空間へいくのだ!」

ノア「そうは…!」

セブン「させん!」

ノアとセブンはザギに掴みかかり、闇の空間ホールに行く。

ノア「すまないセブン。君まで巻き込んでしまった」

セブン「かまわない。これ位の覚悟無くしてウルトラ戦士はつとまらない。それに、私一人で皆が救えるならそれに越した事はない…!」

ザギ「グオオオオ、貴様ら…!」

セブン「皆! あとは任せたぞ!」

ザギ「グオオオオオオ!」

闇の空間ホールは三体を呑み込み、その場からきえた……。

レオ「そんな…! ウルトラセブン!」

エース「何てことだ…！」

80「ノアだけでなく、セブンまでも…！」

タロウ「うう、セブン兄さん…！」

ジャック「くっ…！」

ウルトラマン「くううう…！」

ゾフィー「皆。諦めてはダメだ。セブンもノアもきつと生きているに違いない。まずは、我々ができる最大限の事をやり遂げるぞ！」

突如現れたダークザギの襲撃により、セブンとノアは消息不明。

この2カ月後、メフィラス星人が地球に最後の挑戦の通告をしに来たのであった……。

### 調査隊本部

隊員「メフィラス星人が通告をしてから三日経ちましたね」

隊長「今のところ変わった動きはないな。今日はもう遅いし、街を見て回ったら帰投していいぞ」

隊員「了解。それじゃあ……って、あれ？あれは何だ？」

隊長「ん？どうかしたのか？」

隊員「黒い円盤みたいなのが…でも、良く見たら一つ一つ違う形をしているな…」

隊長「んん？黒い円盤で一つ一つ違う形…まさかそいつは…！」

黒い円盤は街のど真ん中で合体を始め、黒いロボットになった

隊員「うわああ！円盤が合体してロボットになった…！？ていうか、コイツはよく見たらキングジョーじゃないか！」

隊長「いや違う！そいつはただのキングジョーじゃない。右腕に強力なペダニウムランチャーを装備したキングジョーブラックだ！」

キングジョーブラックは両手を広げ回転しだす。

隊員「キングジョーブラックが回り始めた…。一体何をするつもりなんだ…？」

隊長「いかん！すぐにその場から離れるんだ！撃ち落とされるぞ！」

キングジョーブラックは、回転しながらペダニウムランチャーを連発して、街を破壊しつくす

隊員「うわあああ！街が一瞬にして火の海に…！」

隊長「なんて破壊力だ…！こんなもの喰らえば一溜まりもないぞ…！」

すると、突然キングジョーブラックは、赤い巨人に蹴られ、転倒する  
隊員「あ！あの赤い巨人はウルトラセブンだ！隊長、セブンが来て  
くれました！」

隊長「むう？…妙だな。セブンにしては何か違う気がするが…。」

確かに、隊長が言うようにセブンにしては何か違う印象があった

隊員「この際いいじゃないですか！セブン、キングジョーブラック  
をやっつけるー！」

セブン「……………」

キングジョーブラック「……………」

セブン「(何だコイツは…俺は、コイツを知っている…?)」

キングジョーブラック「グオアアア」

バシュッ！ バシュッ！ バシュッ！

セブン「！ デュワッ！」

キングジョーブラックが放ったペダニウムランチャーの弾を避け、  
そのまま上空に浮遊する

セブン「(どうやら俺を敵として見ているらしいな…なら、コイツ  
に用はない！)」

セブン「デュワアア！」

ドガア！

キングジョーブラック「グオオオオオ！」

セブンは急降下キックを当て、キングジョーブラックをダウンさせる

セブン「（随分と固い装甲だな…なら！）」

セブンは、左腕を胸の前に置き、右腕の肘を曲げ拳を握り、腰の部分に置き、額のビームランプから青いエメリウム光線を出す

ビイイイイ！

バシユウウ

だが、キングジョーブラックの装甲にはビクともしない

セブン「（なら、奴のアレを利用させてもらうか……）」

キングジョーブラック「グオオオオオ！」

バシユツ！バシユツ！バシユツ！バシユツ！バシユツ！

隊員「さつきよりも数を増やした…！危ないセブン！」

セブン「デュツ、ダアツ、デュワツ、ジャツ、ダアアアツ」

セブンは、ペダニウムランチャーの弾を弾いて、キングジョーブラ

ツクに命中させる

キングジョーブラック「グオアアア」

バチ…バチ…バチ

隊員「凄いペダニウムランチャーを跳ね返してキングジョーブラックの装甲に当てるなんて」

隊長「そうか、その手があったか…！いかに装甲が固くても、自身の攻撃には対応できないんだな。ということは…今がチャンスだ！」

バツ！

セブンは上空に飛び、宇宙ブーメランアイスラッガーにエネルギーを溜めて、キングジョーブラックの胴体に向けて放ち、アイスラッガーはキングジョーブラックの胴体に貫通はせず、突き刺さる

キングジョーブラック「グオ…グオアア…シュン」

隊員「やった！キングジョーブラックの機能が停止しました！」

セブン「デュワッ！」

キイイイイン

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

セブン「デュワッ！」



バアアアアア！

セブン「デュワアッ！」

バアアアアアアアアア！

ドグワアアアン！

セブンはプロテクターに青いエネルギーを溜め、両腕に溜まると、L字型に組み、青いワイドショットを放ち、更にパワーを上げ、キングジョーブラックを破壊する

隊員「やりました！手強い奴でしたけど、セブンが勝ちました！」

隊長「むう…やはり、セブンには何か違う。何かキングジョーブラックを見て考え込んでいたようにも見える」

隊長「もしかすると、あれはセブンXかもしれん」

隊員「セブンX…って、なんですか？」

隊長「まだ良く分かっていないんだが、セブンが別の次元に来た時の姿だと言われているんだ。」

隊員「じゃあ、セブンとは同一人物なんですか？」

隊長「分らん。一部では別人と言うものもあるからな。とにかく、セブンXに関しては今後調べるにはいい機会だ。とりあえず今日の事は明日まとめよう。帰投していいぞ」

隊員「了解です！」

セブンX「……………まだ明かされないのか。俺の記憶は……………くそっ  
！俺は一体誰なんだ！」

セブンXは、考え込みながらも、上空に飛び、その場から去った

EPISODE 02 記憶無き戦士（後書き）

ウルトラセブンX

必殺技

Lv・1 エメリウム光線

Lv・2 アイスラッガー

Lv・3 ワイドショット

特殊攻撃

ハンディショット

セブンと違う点はエメリウム光線の発射ポーズとエメリウム光線とワイドショットの色で、セブンは緑と黄色だが、セブンXは、青色になっている

キングジョーブラック

必殺技

Lv・1 ペダニウムシユート

Lv・2 ペダニウムハリケーン

特殊攻撃

怪光線

今後、新規参戦キャラクターが登場したら後書きに、必殺技・設定等を書く予定です

感想お待ちしております

EPISODE 03 天使と呼ばれた悪魔

ある日の夜の街

そこには、素早い動きでパンチやキックを休めることなく連続で繰り出す2体の巨人がいた

ティガ「ハアッ！」

キリエロイド？「フンツ、ハッ！」

隊員「隊長！街中でウルトラマンティガがキリエロイドと交戦中。どちらにも一歩も譲らない対決になっています。」

隊長「いかん！そいつはキリエロイド？じゃないか！前と違って、ティガと同様にタイプチェンジができる奴だ。強敵だぞ！」

ティガ「タアッ！ハアッ！」

キリエロイド？「フンツ！ハッ！」

ティガ「タアアアアアッ！」

キリエロイド？「ハアアア……ハッ！」

ティガのスラップショットとキリエロイド？の飛び蹴りがすれ違い、火花が散る

ティガ「ジョイッ！」

キリエロイド？「ゲウウウウ……」

脇腹を抑え片膝の常態から立ち上がるティガとキリエロイド？

ティガ「ムウウウン……ハアッ！」

キリエロイド？「ハッ！」

ティガは、怪力形態の赤に変色し、パワータイプにタイプチェンジする。キリエロイド？も腕に強力な刃が生えたパワー重視の形態になる

ティガ「チャアーツ！ハアッ！」

キリエロイド？「シヨオアツ！フンツ！」

ティガのパンチが当たり、キリエロイド？の両腕の刃が、ティガがかわした後ろにあつたビルを切り裂いた

隊員「な、なんて切れ味だ……あれに当たったらタダじゃ済まないぞ……！」

隊長「だが、ティガは一回キリエロイド？と戦った事もあるし、パートナーも分かっているしな。現に今の現状ではティガの方が有利だしな」

隊長の言う通り、ティガは一度戦った事もあるので、現状ではティガの方が有利だった。ティガもパワータイプでありながらもキリエロイド？の攻撃をかまし、重い打撃を与えていた

ティガ「チャッ！」

キイイイイン

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

ティガ「ハアッ！」

ズバアアアアッ！

キリエロイド？「グオ！」

ドオオオオオン！

ティガの必殺技デラシウム光流が、キリエロイド？に命中して、キリエロイド？は倒れる

隊員「ふううう、何とかキリエロイド？を倒したみたいですね。それにしても隊長。なんで前に倒された怪獣が復活するんでしょうかね？ジエロニモンは南極でウルトラマンに倒されたはずなのに……」

隊長「その事に関しては度々俺も思った事なんだ。あの時、何か俺達が見落とした事があるかもしれんからなあ」

二人が話していると、キリエロイド？に白い粒子が集まりだした。

隊員「ん？隊長。キリエロイド？に白い粒子が集まり始めたんですけど、……まさかこれって！？」

隊長「なんだと！？なぜカオスヘッダーが！？前の戦いで、コスモスが浄化したはずだぞ！」

カオスヘッダーは、キリエロイド？に集まると、カオスキリエロイド？に変貌した

カオスキリエロイド？「シュウオアア……」

隊員「な、なんて姿なんだ……。前より強くなっているに違いないですよ……。」

隊長「これでは、いくらティガでも危険だ。頑張れ！」

ティガ「ムウウン……ハアッ！」

ティガは素速い動きの戦法が得意な紫色のスカイタイプにタイプチェンジする

カオスキリエロイド？「シュウウン……」

カオスキリエロイド？は、背中に大きな翼が生えた高機動型のタイプになる

ティガ「タツ！ハアッ！」

カオスキリエロイド？「シヨアア、シヨウアア」

ティガは素速い攻撃を繰り返すも、カオスキリエロイド？は軽く受け流している

ティガ「チャツ！」

スパツ、キイイイン

ティガ「ガアアアア、ハアツ！」

ギユワアアアン

ガ、ガ、ガ、ガ、ガ、ガ、ドオオオオン

ティガは上空に飛び、ランバルト光弾を放つが…

カオスキリエロイド？「シュウオアアア」

ドオオオオン

カオスキリエロイド？も上空に飛び、ランバルト光弾を避ける

そのままカオスキリエロイド？は、ティガに体当たりして、ティガを掴むと、更に高く飛び、Uターンして高速で地面に向かい、ティガを地面に叩き落とす

ドオオオオン

ピコン…ピコン…ピコン

ティガは地面に伏してしまい、カラータイマーも点滅しだす

隊員「た、隊長！このままだとティガが……！」



隊長「落ち着け！まだ負けた訳じゃない。必ず奴に勝つ方法があるはずだ！」

すると、急に街のありとあらゆる物から光がひかりだした

カオスキリエロイド？「!?!」

隊員「隊長…この光は…」

隊長「恐らく、前にティガの戦いを見た人達が街中に呼び掛けて、光を集めさせたんだ。……ということは、今なら逆転できる！」

ティガ「ムウウン……ハアッ！」

ティガはタイプチェンジしてマルチタイプに戻った

カオスキリエロイド？「シュウオアアア」

カオスキリエロイド？も翼を引っ込めて、マルチタイプと同じ標準型になった

ティガ「チャッ！タッ！ハアッ！」

カオスキリエロイド？「フンッ、ハッ！」

ティガ「チャアーツ、ハアッ！」

カオスキリエロイド？「グオオオオ！」

ティガの飛び蹴りが、カオスキリエロイド？を吹っ飛ばし、ダウン

させる

ティガ「ハアッ！」

キイイイン、シュオオオン

ガ、ゴワアアア、ズオオオオン

ティガ「チヨイツ！」

ズバアアアッ！

シャイン シャイン シャイン シャイン

カオスキリエロイド？「グウ！グオオオオオオ！」

ドグワアアアン！

ティガは、最強必殺技ゼペリオン光線を喰らわせ、カオスキリエロイド？を倒した

隊員「やったー！カオスキリエロイド？を倒しました！」

隊長「ふう、やれやれ。一時はどうなるかと思っただが、何とか良かったか…」

隊員「それにしても隊長。あのカオスヘッダー、一体何なんでしょうね？」

隊長「それについては重点的に調査する必要があるな。しかし一体、

あのカオスヘッダーはどうやって復活したんだ……？

EPISODE 03 天使と呼ばれた悪魔（後書き）

キリエロイド？&カオスキリエロイド？

必殺技

LV・1 フライングクラッシャー

LV・2 ネイルスライサー

LV・3 闇の霧

書いていてとりあえず思ったこと。

平成陣やりにきい！

そう思いました。ティガにいたっては、ぜってえーに、批判来そう  
だわ……。

だって、ティガとキリエロイドの声って、文字で表すの絶対無理だ  
ろ！

リバースの必殺技効果音。デラシウム光流とランバルト光弾はまだ  
いいにしても、ゼペリオン光線ひどすぎる……。

とにかく作者は、思い付きで書いているので、気に食わない点が多く見られると思いますが、これから、よろしくお願いします。

EPISODE 04 蘇る古の竜

隊員「本部、応答を願います！怪獣島で現れた怪獣が現在ウルトラマン80と交戦中！怪獣の映像を送ります。」

怪獣島でウルトラマン80と戦っていたのは、80が昔倒した怪獣、サラマンドラだった。

隊長「サラマンドラだと…！奴らめ、よりによって厄介な怪獣を復活させたな。気をつけろ、奴の鼻から出てくる摂氏1300度の火炎には、当たらないようにしろよ！」

80『シヨワツ！』

80はサラマンドラの、頭にチョップを何発も叩き込むが、サラマンドラは頭を振り、80を振り払い飛ばす。

80『シヨワツ！』

80はサラマンドラの弱点である喉に、ウルトラダブルアローを撃ち込む。

サラマンドラ『ギャオオオン！』

隊員「やった！サラマンドラの奴、弱点を攻撃されて、苦しみ出しましたよ！」

隊長「サラマンドラは喉を攻撃されると再生能力が無くなってしまふんだ。叩くなら今しかないだろう。」

80『テアアアア！』

サラマンドラ『グワオオオ！』

80の飛び蹴りがサラマンドラの顔に当たり、サラマンドラをダウンさせる。

サラマンドラはそのまま、目を閉じて起き上がらなくなった。

隊員「ふう〜、サラマンドラも再生する心配はありませんし、倒したって、事でいいんですかね？」

隊長「いや、分かんぞ。前にセブンの時に再生して、改造怪獣に進化する可能性があるかもしれん。」隊長の言った事が当たってし

まったのか、サラマンドラの元に、バルタン星人の円盤が飛来する。隊員「た、隊長！バルタン星人の円盤が…！」隊長「いかん！バルタン星人の奴、サラマンドラを改造怪獣にするつもりか…！」

バルタン星人の円盤は、紫色の光線をサラマンドラに浴びせると、サラマンドラは起き上がる。

すると、サラマンドラは急に頭を両手で抑えて、苦しみだした。

やがて、サラマンドラがおとなくなると、サラマンドラは白く光りだし、その光が消えると、先程の茶色のボディとは違い黒いボディになり、両手両足を筋肉で太くなっている。爪も鋭さを増し、目の眼球も無くなって、白眼になった。

この怪獣こそが、バルタン星人の科学力によって誕生した、改造サラマンドラである。

改造サラマンドラは80に向かって鼻から火炎放射したが、80は普通に回避する。

だが、改造サラマンドラが出した火炎放射は、地面を一瞬にして溶かした。

隊員「な、なんて威力だ…元々は摂氏1300度なのに、こんな軽く10倍の威力がありますよ…！」

隊長「あの火炎放射もそうだが、サラマンドラの元々の特有能力である、再生能力もどれぐらいパワーアップしているか分からん。気を付ける！」

EXサラマンドラ『ギャオオオン！』

80『シヨワツ！』

80は改造サラマンドラに掴みかかるが、吹っ飛ばされる。

80『シヨワツ！』 それならばと、80はサラマンドラの

弱点である喉にバツクルビームを撃つが効果がないようだ。

隊員「弱点を攻撃したのに、効いてない…！」

隊長「やはり、弱点を守る為に強化されていたか。80は、弱点である喉に効果が無いと分かったのであるのなら、サラマンドラの再

生能力をどうやって無効化して、倒すと言う事になるな。」

80は、改造サラマンドラと戦いながら、他に弱点はないかと、攻撃をしながらサラマンドラを観察する。

しかし、どこを攻撃しても効果は無い。体も前より頑丈にもなっているためでもある。

だが、80はまだ攻撃をしていない部位を見つける。

それは、腹部だった。他の弱点を探す為に、つい腹部の存在を忘れていたのだ。

ウルトラ戦士は、地球上で戦うエネルギーは限られている。

一か八か…、80は右手の拳に力を溜め、改造サラマンドラの腹部にパンチを叩き込む。

すると…、

EXサラマンドラ『グワオオオン！』

改造サラマンドラは腹を抑え、苦しみだした。

隊員「やった！改造サラマンドラに効いている！」

隊長「そうか…！きつと改造サラマンドラは弱点と手足を強化した分胴体がもろくなったんだな。となると…胴体を重点的に攻めれば、

改造サラマンドラを倒せるかもしれん。…80！今がチャンスだ！」

80『シヨワ、テヤアー！』

EXサラマンドラ『グワ、グオ、グワオオオン！』

80は改造サラマンドラの腹部を攻撃し続ける。肝心の改造サラマンドラも再生能力が追いつかない位苦しそうな様子だった。

80『シヨワッ！』

80はポーズをとると光が一回光った後、光が80の両腕にエネルギーが集まりだす。

80は両腕をL字に組んで溜まった光のエネルギーを一気に改造サラマンドラに向けて放出する。

これこそが80最強の必殺技『サクシウム光線』である。

EXサラマンドラ『ギヤオオオオオ！』

ドガアアアアア！



サクシウム光線の高い威力の前に、改造サラマンドラの再生能力は役に立たなかった…。

隊員「今回の改造怪獣は、やっぱりバルタンが関わっていましたね」  
隊長「やはりバルタンの科学力が改造怪獣を生み出しているのだから…だが妙だ。バルタンの科学力よりも恐ろしい怪獣が、いずれ俺達の前に現れると思う…。そんな気がする…。」

EPISODE 04 蘇る古の竜（後書き）

・ウルトラマン80

必殺技

Lv.1 バックルビーム

Lv.2 ウルトラレイランス

Lv.3 サクシウム光線

特殊攻撃

ウルトラダブルアロー

・サラマンドラ

必殺技

Lv.1 ロケット弾

Lv.2 摂氏1300度火炎放射

特殊攻撃

再生能力

・改造サラマンドラ

必殺技

Lv.1 怪力パンチ

Lv.2 摂氏13000度火炎放射

特殊攻撃

再生能力

感想お待ちしております

## EPISODE 05 水の惑星

最近、南極の氷が減っていくという現象が世界中に伝えられていた。

最初は地球温暖化によるものかと思っていたが、いくら温暖化と言えど、氷が減るのはいくらなんでも急すぎる。

疑問に思った調査隊は、南極について、今回の現象を調べることにした…。

隊員「うゝ相変わらず南極は寒いなあ。それにしても、確かに見てみると氷は減っていますね。」

隊長「ただの地球温暖化にしては、何か引つ掛かるからな。何か出てくるか分からんからな。気を付けるよ。」

隊員「了解です！」

しばらくへりは南極を飛び回っていたら、隊員は何かを見つける。

隊員「ん？隊長、何だか触手みたいなものがありました。」

隊長「なに？触手だと？」

隊員「あ、隊長！触手が海の中に消えて、代わりに氷の上に怪獣が出てきましたー！」

隊長「そいつはレイキュバスじゃないか！となると、さっきの触手はスヒュームか！」

現れたレイキュバスは口から火炎弾を吐き出して、氷を溶かしていた。

隊員「レイキュバスの奴、火炎弾で氷を溶かしていつている…。氷が減っていくのはコイツの仕業だったのか…！」

隊長「このままでは、南極が消滅して、地球が洪水にあい、水の惑星になってしまうぞ！」

その時上空から、光が落下した。

その光の正体はウルトラマンダイナだった。

隊員「ダイナだ！ダイナが来てくれた！」

隊長「レイキュバスはスヒュームに操られている。何を仕出かすか分からん。気を付けるダイナ！」

ダイナ「フツ！」

ダイナ「デアアア！」

レイキュバス「ギイヤアア！」

ダイナはレイキュバスに向かって飛び蹴りを放った。

レイキュバスは諸に喰らい、ダウンする。

ダイナ「ダアツ！ダアツ！」

ダイナはパンチをひたすら叩きつける。

後退したレイキュバスは足元がふらついていた。

ダイナ『シヨワツ！』

ギシュウウウン！

ガシツ！

ダイナ『！グワツ！』

レイキュバスに向かい走り出したダイナ。

しかし、突然現れたスヒュームにより、足を掴まれてしまった。

更には両手まで掴まれてしまい、動く事ができなくなってしまった。

レイキュバス『ギユウウウン…！』

レイキュバスは右腕の自慢のハサミを構えると、ダイナに向かい歩きだした。

ダイナ『ウオオオオ…！デアアア！』

ブチィ！

スヒューム『！』

ダイナは力いっぱい腕に力を込め、スヒュームを引きちぎった。

スヒュームもたまらず、再び地面に潜っていった。

ダイナ『デアア!』

レイキュバス『ビユウウ!』

向かって来るレイキュバスを掴んだダイナは、レイキュバスにスープレックスをかまし、レイキュバスの頭を思い切り地面に叩きつけた。

その後レイキュバスは、仰向けの状態になり、両手足が力無くダラんと崩れ落ちた。

レイキュバスはピクリとも動かない。

隊員「やったー!レイキュバスは倒れたし、あとはスヒュームだけ。地球も水の惑星にならずに済みますね。」

隊長「妙だ…スヒュームが作った怪獣がこれぐらいでやられるとは思えん。まだなにかあるのか…?」

ドシユウウ!

するとレイキュバスは突然スヒュームに絡まれて海中深くに沈められた。

隊員「あ!レイキュバスが!」

隊長「スヒュームめ…！なにをしでかす気だ！？」

レイキュバスとスヒュームが消えるとダイナは辺りを見回した。

バシャアアア！

カオスレイキュバス「ギシユワアア…」

すると突然ダイナの背後から先程とは異なるレイキュバスが現れた。

体色は全体的に黒っぽくなり、左手の小さい鍔は右手の大きい鍔と同じ位大きくなっていた。

更に口からは勢いよく出てきたのは、なんとスヒュームだった。

これこそが、レイキュバスとスヒュームが融合して進化したカオスレイキュバスである。

隊員「レイキュバスがより強くなってより不気味になって復活した！？」

隊長「生みの親自らが融合してパワーアップを果たしたのか…！」

赤い目でダイナを睨み付けるカオスレイキュバス。

ダイナ『へア！』

ダイナは走り出すと、カオスレイキュバスに体当たりをかましてカオスレイキュバスを怯ませた。

怯んだ隙にダイナはカオスレイキュバスを掴むと、両手でカオスレイキュバスを持ち上げる。

投げ飛ばそうとした時、カオスレイキュバスの口からスヒュームの触手が出てくる。

スヒュームはダイナの右腕に巻き付くと、ジュウウウ、という音を立てるとダイナは苦しみ、カオスレイキュバスを落としてしまう。

ダイナ『グ、グワアアア…！』

ダイナは苦しそうに右腕を押さえてしまう。

それにより、隙ができてしまい、カオスレイキュバスが走りながらスライディンググタツクルをかました。

ダイナはなんとかファイティングポーズを取り直す、右腕は火傷の跡が残っていた。

スヒュームの触手は高熱の温度を出す能力があり、長時間触れていると、いずれは溶けてしまう。

カオスレイキュバス『ギョオワアアア！』

ダイナ『フツ、ヘア、ダアッ！』

カオスレイキュバスの連続鋏攻撃をかわすダイナ。

しかし右腕ばかりを気にしていて、自分の左腕に襲い掛かってきた右腕の鋏の攻撃の対応に遅れてしまった。



カオスレイキュバス『ギシュワアアア!』

バキイ!

ダイナ『グワアアア!』

骨が砕けたような鈍い音がした。

その音は調査隊の隊員の耳にも届くほど聞き取りやすかった。

隊員「ダ、ダイナー!」

隊長「落ち着け!何があつた!」

隊員「ダイナの左腕が…レイキュバスに折られました!このままだとダイナが!」

隊長「なんて鉄の威力だ…!ダイナの腕を軽々と折ってしまうなんて…!」

ピコン、ピコン…

ダイナのカラータイマーは遂に青から赤に点滅しだした。

立ち上がるうとしても腕に力が入らない。

カオスレイキュバスは両方の鉄でダイナの両腕を掴むと、カオスレイキュバスの口から出てきたスヒュームはダイナの胴体に巻き付いた。

スヒュームは高熱の温度を発し、ダイナを苦しめる。

遂にカラータイマーの点滅の速度は速く鳴り始めた。

カオスレイキュバスはトドメと言わんばかりにダイナを海中に引きずり込み始めた。

隊員「ダ、ダイナが…！」

隊長「くそう…！最早これまでか…！？」

調査隊の誰もが諦めた時だった…

なんと吹雪が止み、空が晴れて黒雲を突き破る光が現れた。

その光こそが、太陽だった。

太陽の光はダイナに注ぎ、ダイナのカラータイマーは赤から青に戻り、体力が回復する。

それだけではない。火傷をおった右腕、折れた左腕も完治した。

ダイナ「ウオオオ…デアア！シエア！」

ズバア！

カオスレイキュバス「キュワアアア！」

ダイナはカオスレイキュバスの鉄をはらうと、スヒュームをチョッ

ブで切断した。

切断されて、悲鳴をあげたのは、カオスレイキュバスなのか、それともスヒューム本体によるものなのかは分からない…。

隊員「太陽だ…吹雪が止んで太陽の光が現れた！」

隊長「太陽の光はなんと言ってもウルトラマンにとって必要な光…もつと言えば力の源だ。天が呼んだ自然の奇跡。ダイナ！一気にとたみかける！」

カオスレイキュバス『ギョオワアアア！』

バシユウ！バシユウ！バシユウ！

ダイナ『ダツ！デヤ！シエア！』

カオスレイキュバスは火炎弾を吐くが、ダイナは軽々と弾く。

ダイナ『ハッ！』

ギョウウウン…

ダイナ『デアアアア！』

バシイ！

カオスレイキュバス『ギシユワアアア！』

ダイナは高く飛び、一回転すると右足でカオスレイキュバスの脳天

に踵落としを決めた。

ダイナ『フツ！ウオオオ…！』

ダイナが一步下がると、拳同士をくっ付けてパワーを引き出す。

その後右腕を斜めに上げ、左腕を斜めに下げると、手のひらからパワーが溜まっていく。

やがて手のひらにあった光が消えると、両腕を十字に組んだ。

ダイナ『デアア！』

バシユウウウウ！

右腕から発射された青い光線。これこそが、ダイナ最強の必殺技『ソルジエント光線』である。

カオスレイキュバス『ギョオワアアア！』

ドグワアアアアン！

ソルジエント光線に呑み込まれたカオスレイキュバスは爆散した。

ダイナ『シヨワ！』

ダイナは両手を上げて、飛び去っていった…。

次回『EPISODE 06

赤い英雄』に続く…。



EPISODE 05 水の惑星(後書き)

・ウルトラマンダイナ

必殺技

LV・1 レボリウムウェーブ

LV・2 ガルネイトボンバー

LV・3 ソルジエント光線

・レイキュバス

LV・1 冷凍ガス

LV・2 火炎弾超乱射

・カオスレイキュバス

LV・1 火炎弾連射

LV・2 カオスシザースコンボ

感想お待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8114x/>

---

ウルトラマン Faithingu Evolution Rebirth THE Fainal Battle

2011年12月21日23時49分発行